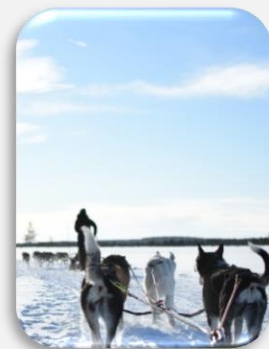


向井由衣子さん

音楽研究科 博士前期課程 音楽専攻作曲領域

留学先：タンペレ応用科学大学（フィンランド）

留学期間：2022年1月～5月



留学先の大学について

留学先であるタンペレ応用科学大学は、フィンランドで2番目に大きい都市に位置する技術、看護福祉、経営管理、文化に重点を置いた総合大学です。学生数は約10,000人で、メインキャンパスの他に2つのキャンパス（Mediapolis、Proakatemia）があります。過去に音楽学部のキャンパスもあったそうですが、数年前にメインキャンパス内に移動しました。メインキャンパスまでは、タンペレ市の中心部から約3km離れた場所に位置し、キャンパス近くにバス停やトラム（路面電車）の駅があり、アクセスもしやすかったです。MediapolisのキャンパスはMedia & Artsコースがあり、舞台やデザイン、メディア系に強い部分もこの大学の強みだと感じます。残念ながら音楽学部はMediapolisのキャンパスではないため、あまり利用することはありませんでしたが、録音スタジオや機材レンタルの施設がありました。

留学実現のために努力した点

コロナの影響で当初予定していた留学期間より1年延期されました。当時、留学の受入がいつ再開されるかの見通しも立っていなかったため、本当に留学できるのかという不安が大きく、留学に対するモチベーションを維持することが課題でした。

協定校へはCVと志望動機書（Motivation Letter）の提出が必要でした。愛知県立芸術大学の国際交流室が企画していたCVを書くためのオンライン講座を受講し、準備を進めました。英語での言い回しや文章の組み立て方などをそこで学ぶことができました。志望動機書については、講座のほかに愛知県立芸術大学の英語の先生にも添削をお願いしました。

タンペレ応用科学大学では、コロナで来られなくなった学生にオンラインでいくつかの授業を開講しており、英語でのコミュニケーションが不安要素だった私は、作曲のレッスンの他に言語交換プログラム（Language Exchange Program）を受けました。英語を介して私はフィンランド語を学び、相手には日本語を教えました。日本では英語を話す機会がなかなか作れなかった私にとって、このプログラムはリスニングやスピーキングの良いトレーニングになりました。また、現地の学生と事前にコミュニケーションが取れたことで、現地で知り合いがいるという状況が安心材料になり、渡欧後の不安が少なくすみました。

留学先の授業について

コロナ渦ということもあり、大学が始まってもしばらくはオンラインで進められました。音楽学部で開講されているクラスはほとんどがフィンランド語での授業だったため、私は興味があったクラスの聴講ができないか先生に直談判をしました。OK をもらったもののその直後に先生がご病気になってしまい週1回のレッスンは中断、そして聴講する予定だったクラスも休講となってしまいました。しかし、日本にいた時のように先生とマンツーマンでレッスンを受けることができたのでレッスンは充実していました。Hannu Pohjannoro 教授からは音にする以前のプロセスについて指摘され、やりたいことをどのように再現させるかを中心にディスカッションをしていきました。これまでは楽譜に音を書いた状態でレッスンを受けることが多かったため、スケッチをもとに作品のプレゼンを行い先生からコメントいただくことが新鮮で、良い経験になりました。その場ですぐに英語で説明できる自信がなかったため、伝えたいことを事前書き出して準備するようになっていました。

留学中の日常生活について

フィンランドでは、シェアフラットという他の留学生と部屋を共有する形態が主流のようです。鍵付きの一人部屋がそれぞれにあり、キッチンやシャワールーム、トイレを共有するというスタイルです。私は3人のフラットメイトがいました。専攻する分野も言語、文化も異なる4人の共同生活は楽しかったです。それぞれが思っていることを話せない状況というのはお互いにストレスになると考え、コミュニケーションを取ることを心がけました。キッチンやシャワールームを使う時間帯は特に決めず、自然とお互いが重ならないように動くようになっていました。ただし、掃除は週の担当を決めていました。

フィンランドは学割の効果が大きいことが嬉しかったです。公共交通機関の定期券や演奏会のチケット、レストランでの食事や日用品の購入時にも学割が使えました。キッチン用品や布団などは大学からレンタルでき、留学終了後に返却すると返金してもらえるサービスもありました。学生へのサポートが充実している印象を受けました。

デザイン性のある建物も魅了のひとつです。フィンランドにはスタイリッシュな図書館があり、カフェも併設されてリフレッシュできます。練習室もありました。沢山の人が利用していました。



演奏会のリハーサルの様子



友人との食事は誰かのアパートで作って食べる事が多かったです

留学中に努力した点

とにかく、外へ出て沢山のひととおおうと決めました。準備してきた英語も話さなければ意味がないと思い、大学や友人、音楽関係者の方が教えてくれたイベントや演奏会に積極的に参加するようにしました。

大学では自作品を英語でプレゼンテーションする機会を初めていただきました。プレゼンにあたって日本の文化や音楽を研究しているクラリネット奏者 Reetta Näätänen さんがサポートしてくださり、プレゼン内容についてディスカッションをしながらテーマを決め、プレゼン原稿を作り、スライド作りにも力を入れました。学期末には作曲コースの試演会があり、それに参加し現地の学生に演奏をしていただきました。授業がほとんどオンラインだったこともあってなかなか音楽の学生と知り合う機会も少なかったのですが、友人に色々な演奏の学生の連絡先を教えてもらい、かたっぱしから出演依頼のメッセージを送りました。英語を介してのリハーサルは不慣れな部分も多く、ニュアンスなど楽譜に書かれていないことを英語で簡潔に説明する難しさを感じました。もっと国外でのリハーサル経験を積んで、言い回しなどブラッシュアップしていきたいと思います。

留学で気づいた点

日本に居た頃は英語で話しかけることへ躊躇いがあり、英語の間違いを恐れて中々積極的にはなれませんでした。しかし、留学を経てさほど自分の言語力に相手は関心がないことがわかり、それが英語を話す時の緊張や不安から吹っ切れるきっかけになりました。語学が堪能であるに越したことはありませんが、たとえ相手の言っていることが分からなくても恥ずかしがらずに聞き直したり、相手への気遣いを忘れず楽しく過ごすことを意識したりする姿勢は誠実さに繋がり、自然と交流の和が広がることに気付きました。ある日、友人と話していて言葉に詰まってしまった時、相手の表情を見て焦りを感じた私は「ごめん、英語が上手じゃなくて。みんなのように話せないことが恥ずかしい。」と言うと、「いや、十分喋れているよ。他人じゃなく過去の自分と比べるんだよ。」と言葉を返してくれたことが印象に残っています。たとえ 100 パーセントの回答ができなかったとしても、今ある自分の手札で伝えたいことを伝えようという気持ちが大切だと感じました。今でも英語が上手く出てこないことへの悔しさはありますが、話すことへのためらいは留学を経て無くなった気がします。



タンペレ・フィルハーモニックオーケストラの
カンテレ奏者 Eva Alkula さんからカンテレの
レクチャー。

ご厚意で貸していただきました。

留学の成果

留学中に作曲した作品が、タンペレ・フィルハーモニックオーケストラメンバーによるアンサンブル TampereRaw のコンサートピースに選ばれました。また、留学中に会った音楽家の方への委嘱作品も決定し、今年夏に初演が予定されています。

作曲に関すること以外としては、現地の学生や留学生と交流できたことが私の財産になりました。異なる文化を持った人たちと生活するという経験は、私にとって非常に良い経験になりました。日本語が通用しない環境でフラットメイトと良好な関係を続けられるように頑張ったことで、コミュニケーション力も鍛えられたと思います。「由衣子は何でいつも私に許可を取るの？」というフラットメイトからの質問には驚きました。（自分とは関係がないのに）「～してもいい？」と逐一尋ねる私を不思議に思ったそうです。私はそれが礼儀だと思っていたのです。これに限らず、日本で当たり前のようにやっていた自分の考えや振る舞いを見直すきっかけになり、暗黙の了解といった表に出てこないコミュニケーションに対して、一度批判的な思考を持つとうという意識ができるようになりました。

経験をどう生かすか

フィンランドとの交流は、留学以前からありました。私がフィンランドに興味を持ったのは2019年のフィンランド・日本国交100周年を記念したコンサートのために曲を書いたことがきっかけです。そこで初めてカンテレ kantele というフィンランドの伝統楽器の存在を知りました。私は博士後期課程に進学しカンテレと現代音楽についての研究をする予定です。留学でカンテレ奏者の方々と繋がれたことで、今後の研究について相談できる環境が整いました。作曲家としても北欧の音楽関係者との新しいコラボレーションを続け、日本と北欧のコミュニティの発展に貢献できるような活動ができるよう、日々努力したいと思います。



ヘルシンキにあるコンサートホール